

しかし、私がチンパンジーの社会関係の面白さにすっかりはまると、彼は指導教官というより虫捕り仲間のような振る舞いを見せるようになりました。たとえば、3頭のオトナ雄が行列縦隊で歩きながらパントフートを唱和したとき、全頭揃って片足を上げたまま凝固したことがありました。遠方からの返答に耳を澄ます反応です。彼はこの瞬間が面白くてたまらないという様子で、私を振り返り、チンパンジーを指さしました。その無邪気な表情がまた面白く、今でもよく思い出します。

当時のマハレ M 集団はまさに歴史の転換点でした。有名なアルファ雄ントロギが失脚して追放状態にあったのです。クーデターの主役カルデは、同盟者であり互いにライバルでもあるベータ雄のシケ、ガンマ雄のンサバとの三者間関係を巧妙に操作しながら、新アルファ雄としての地位を保つとともにントロギの復帰を許さない状況をつくっていました。

ところが、西田さんが帰国の途についてまもなく情勢が変わりました。シケが病気で姿を消し、三者間関係の一角が崩れたのです。カルデは、10歳若いンサバの挑戦をまともに受けるようになり、やがて失脚して一人歩きを始めました。ここで、カルデは融通無碍なチンパンジーらしさを発揮しました。彼は自分が追放したントロギを連れて群れに戻ったのです。カルデの支持を得たントロギはアルファ雄として復帰しました。この連立政権にンサバは何もできず、ベータ雄の地位に甘んじました。

ソ連崩壊と同時に進行した一連の出来事を私は事細かに手紙にしたため西田さんに報告しました。それは彼が手紙をむさぼり読んでくれることが容易に想像できたということもありますが、これを観察しているのは私です、というメッセージを伝える意味もありました。彼は、必ずすぐに返事を寄越し、情勢の推移に大いに興奮していることを伝えてくれました。帰国直後の電話で、彼は「いやー君の手紙、じつに面白かった!」と言ったかと思うと、三秒ほど間をおいて「よくできました!」と小学生を褒めるかのような台詞を発せられました。そして、東京、お茶の水駅で落ちあうと、本郷の天麩羅屋に私を連れて行き、彼の好物、海老天丼をご馳走してくれました。

2007年2月、大腸癌の手術をされてまもない西田さんと、講演準備の手伝いのため、東京のアニカプロダクションにてお会いしました。1989～1995年頃のビデオを見ているとき、「思えばこの頃がいちばん楽しかったなあ」と呟かれました。M 集団のチンパンジーが十分観察しやすくなったことに加え、まだ観光客も少ない時期に、オトナ雄たちが立ち回りを演じてくれたことが痛快だったようです。いずれにせよ、そういう時期に彼に同行する機会を得た私は幸運でした。

2009年8月、西田さんは2年ぶりのマハレ調査旅行を敢行しました。たまたま私と出発日程が重なり、往路の行程からマハレでの彼の2週間の滞在まで一緒に行動することになりました。私にはこれが西田さんの最後の調査となる予感がしました。しかし、本人は特別な感傷を漂わすことは一度もなく、いつも通り昂揚した様子でマハレまでの旅行を楽しまれていました。

マハレに着いた最初の数日間こそ、西田さんはせいぜい2km南のンタレ川に着くだけで疲れた様子でしたが、日々調子を上げ、10日目には4キロ以上南のルブルング

川を渡るチンパンジーを観察しました。

チンパンジー調査の今回のテーマは子どもの遊びでしたが、いつもながら好奇心全開で何でも楽しんでおられました。彼が本誌に最後に報告した「パッフィー(9歳雌)の乳首いじり(1990年代に発見された新奇行動の一つ)の仕方は父親と推定されるアロフと同じだった」という観察は、偉大なチンパンジー学者の最後を飾るには小さすぎる発見ですが、『大型類人猿の権利宣言』(1993)に「チンパンジーはいつも新しい!」という名文句を残した彼らしい観察でした。

ある日、二人で公園北に隣接するカトウンビとブヒングを回りました。すでに駐タンザニア日本大使館が検討を始めていたカトウンビの簡易診療所建設計画のために現地住民の意見聴取と建設予定地視察をする目的でした。やはり大使館の草の根無償資金協力により建設したカトウンビ小学校も訪問し、子どもたちの元気な様子を見ることができました。が、800人超の生徒に対し教師4名という深刻な教師不足、机の不足、床の劣化など学校の窮状を目の当たりにし、真剣な表情で写真に収めていました。

カンシアナ滞在中、西田さんは終始機嫌よく、夜は少しのビールとタンガニイカ湖の魚、固い鶏肉あるいはヤギ肉などを楽しみました。食後はもちろん、恒例のヒトとチンパンジーの噂話です。たとえば、アルファ雄が肉分配や交尾の際に見せる個性的な行動について互いの観察を報告しあい、ときに爆笑しながら楽しく過ごしました。長い歳月は、私から遠慮を消し去っていたようです。

西田さんがマハレを発った8月27日の朝、カシハの浜で彼を見送ったのは私一人でした。かつてはカシハに滞在する大勢の人たちが、帰途につく研究者との別れを惜しむ光景がありましたが、公園当局が人の往来を厳しく管理するようになった今、それはありません。大勢のエコツアー客を乗せたボートは彼を拾うと、北に針路をとり、あっという間に小さくなりました。湖上の彼の視線の先にはカソゲの森林とその背後に聳えるマハレの連山がありました。46年前と変わらない、その威容を見つめる彼の脳裏にかつてのカソゲが去来したか、来年の再訪を思ったか、今は知る由もありません。

西田さんとの最後の日

中村 美知夫
京都大学

2011年5月27日、お亡くなりになる10日ほど前に西田さんのお宅を伺った。いくつか引き継いでおきたいことがあるから、という連絡をもらって伺ったのだが、結局それが西田さんにお会いした最後になってしまった。

4月、5月は私も新入院生向けの講義や実習などの担当が多く、それにかまけて一月ほどお見舞いに行っていなかった。一ヶ月ぶりにお会いした西田さんは、前よりもさらに痩せ、小さく見えた。私が行くとまずベッドに寝たまま迎える非礼を詫びられた。「耳が片方聞こえなくてね」とおっしゃっていたが、やり取り自体は非常にはっきりしておられた。

ときに沈黙して、一つ一つ思い出すように、引き継ぐ内容をお伝えになった。マハレの古くからのデータのこと、入力したけれどまだ論文にしていないデータのこと、そして西田さんの最後の仕事となった英語の本のこと…。最後の最後まで研究のことを考えておられたわけだ。

最後に気にかけていたのは、マハレの調査助手たちのことだった。定年を迎えて引退した古株の調査助手たちが老後に困らないようになんとか考えてくれまいか、と頼まれた。40年以上に渡るマハレでの研究へのトングウェの人たちの貢献に対して、一番感謝していたのは西田さんだったのだと改めて思った。

西田先生とントロギ

伊藤 詞子

京大学

1995年、私の初めてのマハレ調査の時に起こった、ントロギというあるオトナオスのチンパンジーの死は、先生と、先生のチンパンジーとの深い関わりと、その関係を深く理解する周囲の人々、という鮮烈な印象とともに深く心に刻まれています。先生は瀕死のントロギへの、その場に唯一いた別のオトナオスの接近に対して、躊躇なく間に入って身を挺していました。亡くなったその朝には、必要な資料の記録をとり、その時はどれほど悲しんでいるのか気づきませんでした。しかし全部済んでみると、すっかり落ち込み、もうチンパンジーを見に行く気力がなくなったと漏らしていました。かける言葉も見つかりませんでした。午前三時頃のントロギの最後の異変に気づいたのは先生の奥さんで、一晩中気にかけておられたのだと思われます。さらに、アシスタントの奥さん達が皆でキャンプに先生と奥さんにお悔やみを言いに行きました。後にも先にもこのようなことは見たことも聞いたこともありません。先生の個々のチンパンジーとの関係に対する、このような深い周囲の理解は、相手の区別なく楽しそうに次から次へとチンパンジーとの思い出を語る先生のお人柄があつてのことですが、先生の数々の業績を支えてきた大きな力でもあったと思います。時に大笑いするような先生のチンパンジー談義を、こんなに急に聞けなくなるとは思ってもみませんでした。このントロギの話にも、実は笑い話があるのですが、それはまた別の機会にしたいと思います。

心よりご冥福をお祈りいたします。

西田先生とチンパンジーのビデオ

座馬 耕一郎

(株) 林原生物化学研究所類人猿研究センター

今、マハレでこの文章を書いている。西田先生はもうここにはいないが、西田先生が築き上げてこられた調査基地や、人に慣れたチンパンジーたちは、今も息づいている。

1999年8月は、西田先生が私をマハレへ野生チンパンジー調査に連れて行ってくださった年である。またこの年は、西田先生がご自身のフィールドワークにデジタルビデオカメラを用いた最初の年でもある。以来、ビデオは西田先生の調査に欠かせないツールとなったようである。私もビデオを用いており、調査のメインテーマであった毛づくろいを中心に撮影していたが、西田先生はマハレのチンパンジーのすべてを記録しようとしているように見受けられた。先生は片時もビデオを手放さず、チンパンジーの採食、ディスプレイ、狩猟、歩行、遊びなどを撮影されていた。そしてそのビデオには、必ず西田先生のコメントが入っており、ときにはくすくす笑いをもらしながら、チンパンジーの行動を記録されていた。

西田先生がビデオを用いはじめたきっかけは、チンパンジーの地域間比較をするためであったと思われる。その後先生の興味は、チンパンジーの遊びや新奇行動に移り、ビデオ映像を効果的に用いて研究を推し進められた。こうして蓄積されたビデオ記録は、松阪崇久さんや私の映像とあわせて、チンパンジーの映像行動目録として、2004年の西田先生退官記念行事にて紹介された。これを公開してはどうかと西田先生に伺ったところ了承され、Crickette SanzさんやDavid Morganさん、大橋岳さんから他地域のチンパンジーの貴重な映像を提供いただき、2010年に“*Chimpanzee Behavior in the Wild: An Audio-Visual Encyclopedia*”として出版された。

この本についているDVDの映像の中に西田先生のくすくす笑いが聞こえてくると、西田先生がマハレのフィールドワークを楽しんでいた姿や、チンパンジーに対する愛着が思い出される。



マハレのチンパンジーを撮影する西田先生